

河川と人々との関係を近づける河川空間の有効活用

株式会社オリエンタルコンサルタンツ 正会員 佐藤 俊介

1. はじめに

河川整備は日本の狭い国土、人々の生活を守る上で重要な役割を担ってきた。山地が多く、平野が少ない我が国では、河川の勾配はきつく、流速も大きいことから洪水時には平地では水害が発生しやすい状況にある。そういった状況から、まず住居に適する面積が少ない。現在人口減少となつてはいるが、1億人以上が居住していること自体が、河川整備の成果といえる。

ここまでの整備を行う上では、治水を第一において多くの時間と資金が費やされてきた。水害を抑えることが最優先であるため、それは当然ではあるが、その間には河川と人々の生活とのつながりがないがしろにされた部分があるのも確かである。近年では利水、そして環境という概念が河川整備に取り入れられ、つながりが取り戻されるような施策が行われてきている。

ゲリラ豪雨や巨大台風の頻発、爆弾低気圧による豪雪など、気候変動による災害の増加傾向が続いている。また、進行している少子高齢化や人口減少という縮小社会の中では税収の減少が続くことが想定され、建設することはもちろん、抱えている膨大なインフラ設備を全て維持管理することさえ難しい状況であるといえる。こういった点からも、全ての水害を完全に押さえ込むことは難しく、治水、または河川と人との関係に対する考え方を変える時期に来ているのではないだろうか。

ここでは、治水の歴史を振り返り、現在進められている河川空間の活用について触れた上で、共水という言葉を用い、今後の河川と人々との関係のあり方に関し提言する。

2. 川と人のつながりの歴史

末次の図書を参考に、縄文時代から明治末年までの川と人のつながりを以下に示す。

時代	川と人のつながり	備考
縄文時代	東日本ではサケやマスを捕食して食用としていたため、河川とのつながりは比較的少なかった。	
弥生時代	三角州で稲作が開始されるなど、沖積平野への進出と定住が行われた。それに伴い、各種の集落排水施設が建設される。	鳥取県大山町のため升や環濠の遺跡
古墳時代	河川の氾濫被害が及ばない山麓に水田が開かれ、鉄製道具の普及により田畑の感慨が行われた。	
飛鳥時代から奈良時代	水田が平野で展開され、耕地開発のために堤防を建設。	大化2年(646)年に堤防築造の詔が出された
戦国時代から安土桃山時代	城下町が形成されるなど、本格的な沖積平野への進出が始まった。	武田信玄や豊臣秀吉により高度な治水技術が展開された。
江戸時代	大規模な治水事業が行われ、取水・排水施設が建設された。150年間に人口および水田の面積が焼く3倍になる。	利根川の東遷事業 北上川、大和川の河道付替
近世中期から後期	三都(江戸、京都、大阪)周縁の水辺では庶民の行楽地と遊興地が形成される。河原で芸能がさかんに行われた。 江戸時代から明治末にかけて、河川は舟運の一台動脈となる。	

キーワード 治水, 河川空間の活用, 民間活力, 河川占用,

連絡先 〒151-0071 東京都渋谷区本町3-12-1 住友不動産西新宿ビル6号館 TEL 03-6311-7863

こういった河川と人とのつながりのなかで、多くの文化的活動も行われており、全国にお祭りなどが行われている。また、万葉集など多くの俳句や短歌に詠まれている。現在の川と人との関係と比べると、江戸以降で関係が疎遠なったように感じる。

一方治水整備を進めたことにより、河川はまちの裏となり、人々の意識から遠ざかることで、防災としても水害に対する意識が下がっている。ただし、気象変動が起こるなか完全に水害を抑えることは不可能であり、今後はより河川と人とが近い存在として、共存していく必要があるといえる。

3. 治水、利水、環境、共水

今後の河川と人との関係の観点として、「共水」という概念を考えたい。これは造語であるが、水と共存するという意味になる。人との関係が疎遠になってしまったと懸念している近年の河川整備の経緯は、河川法改定から見てもわかるが、昭和29年の「治水」があり、そこに昭和39年の「利水」が加わり、さらに平成9年に「環境」が加わったといえる。そこにさらに加えたい概念として「共水」をあげる。これは人々の活動をより河川に近づけ、さらに水害に対してただハード的に防ぐのではなく、堤内外の境界をあいまいにするようなソフト的に対応することだといえる。

現在の設備としてこの概念に近いものとして、調節地が上げられる。計算してではあるものの、洪水時は堤防を越えて一時的に水を蓄え、通常時は別用途に用いることができる様子は、古くは霞堤につながる流域での治水対策であり、堤内外の境界があいまいなエリアで、人々の活動が河川に近いといえる。

4. 河川空間の活用

「共水」の考え方に近い施設として調節地をあげたが、すでに活用が進んでいる部分も多い。主な例を以下に挙げる。

名称	概要	場所
深北緑地	以下のような多数の設備が設置され、都市公園として機能している。 BMX・マウンテンバイクコース、芝生広場、桜の園、バーベキュー可能な指定エリア、テニスコート、ドッグランスペース、球技広場駐車場、管理事務所・売店	大阪府大東市
ソーラーオンザウォーター桶川 (桶川調整池)	約1万2400m ² の調節地の水面に、約4500枚の太陽光パネルを設置。市は土地を民間企業に借地料をもらい貸出し維持管理費用にあて、民間企業は売電により事業を実施。再生エネルギーの実際を学べる環境教室も併設されている。	埼玉県桶川市
大柏川第一調節地緑地	調節地の掘り込み部分に、大小15箇所の棚池を整備し、それらを取り囲むように外周路を設置。野鳥の観察場からは調節地の堤防肩から棚池区域を一望できる。ビジターセンターを設置し、住民の体験学習などに役立てている。	千葉県市川市
布施駅前調節池	たびたび浸水被害を受けている地域であったことから、都市計画駐車場事業による駅前整備事業とあわせて、調節地を整備。約12,000m ³ の雨水が貯留でき約50haの浸水被害を軽減している	大阪府寝屋川市

5. おわりに

財政、異常気象、生活習慣の変化から柔軟な河川整備への議論が求められている。調節地の有効活用は人々の生活を河川と近づけることに大きく貢献しており、今後更なる活用が望まれる。そこには民間活力の導入が必須であり、または市民ファンドなどの新たな公共の概念を取り入れることも有効であるといえる。

参考文献

- ・洪水と治水の河川史：大熊考
- ・河川の科学：末次忠志